

1997年『春雨物語』現代語訳

しもつけ

下野の那須野の原に日入りたり。小猿・月夜いふ。

下野の

那須野の原に

日が沈んだ。

小猿・月夜が言う。

「この野は道ちまたにて、暗き夜には迷ふこと、

」この野原は

道が多く分かれていて、

暗い夜には(道に)

迷うことが、

すでにありき。ここにしばらく休みたまへ。

これまでにあった。

ここで少しの間、

お休みください。

ア あない見てこむ」とて、走りゆく。

(道の)様子を 見て来よう。」と言って、

走っていく。

殺生石とて、毒ありといふ石の垣のくづれたるに、

殺生石といって、

毒がある

という

石の垣が

崩れている所で、

火切りてたきほこらしをる。僧一人来たる。

(焚燬は)火を起こして盛んに焚き木を燃やして座っている。僧が一人来た。

目も落とさずで過ぐるさまにくし。

(座っている焚燬の方へ)視線も向けないで通り過ぎる様子は(焚燬にとつて)憎らしい。

「法師よ、物あらばくはせよ。旅費あらば

(焚燬は)「法師よ、食べ物があるなら、(俺に)喰わせよ。

旅費があるなら、

おきてゆけ。いむなしくは通さじ」といふ。

置いていけ。

何も差し出さないとすれば、通すつもりはない。」と言う。

いちぶ

法師立ちとどまりて、「ここに金一分あり。

僧は

立ち止まって、

」ここに金が一分がある。

とらせむ。くふ物は持たず」とて、はだか金を焚燬が

くれてやろう。

食べ物を持っていない」

と言って、

何にも包んでいないお金を焚燬の

手に渡して、返り見もせずゆく。

手に渡して、

振り返りもせずに行く。

「ゆく先にて若き者ら二人立つべし。ウ」焚燬に会ひ

(焚燬は)「この先に、

若い者たちが

二人立っているはずだ。

」焚燬に会って

て物おくりし』というて過ぎよ」といふ。「お忘」と答へ
物を渡した』
と云つて過ぎよ』
と云つ。
(僧は)「おつ」と答えて、

て、足しづかに歩みたり。

足音静かに歩い(てい)つた。

片時にはまだならじと思ふに、僧立ち歸りて、

「まだ一時間は

経っていないだろう」と思う時刻に、僧が引き返してきて、

「樊噲おはすか。我、発心のはじめより偽りいはずる

「樊噲はいらっしゃるか。

私は 仏道に入ったところから

嘘を言っていないのに、

に、ふと物をしくて、いま一分残したる、心清から

ふと物を惜しんで、

もう一分残したままなのは、

心が清らかでない。

ず。これをも与ふぞ」とて、取り与ふ。

「これをも与えるぞ」

と云つて、取り出して与える。

手にすゑしかば、エただ心さむくなりて、「かく直き

(樊噲は自分の)手に置いたところ、

ひたすら心が寒くなって、

「このように真直ぐな

法師あり。我、親・兄を殺し、多くの人を損ひ、盗み

法師がいる。

(それに比べて)私は、親と兄を殺し、

多くの人を傷つけ、

盗みを

して世にあること、あさましあさまし」と、しきりに

して 世の中で生きていること、

ほとほと驚き呆れたことだ」と、

強く思いを改めて、

思ひなりて、法師に向ひ、「御徳に心あらたまり、

法師に向かつて、

「あなた様の(恩徳に(触れて)心が改まりましたので、

今は御弟子となり、行ひの道に入らむ」といふ。

いまは(あなた様の)弟子になり、

仏道に入るつもりだ

と云つ。

法師感じて、「いとよし。来よ」とて、つれだちゆく。

僧は感心して、

「大変良いことだ。

来なさい」

と云つて、

連れ立って行く。

小猿・月夜、出できたる。「おのれらいづこにも去り、

小猿と月夜が

出できた。

(樊噲は)「おまえらはどこにでも去り、

いかにもなれ。我はこの法師の弟子となりて修行

どのようにでもなれ。

私は

この僧の弟子となって、

仏道修行を

せむ。オ襟もとの風、身につくまじ。

しよう。襟元の風(のようなお前たち)は、(私の)身(の側)に付いてはいけない。

また会ふまじきぞ」とて、目おこせて別れゆく。

もう会わないつもりだぞ」

と言って、

視線を送って別れていく。

「無益の子供らは捨てよかし。懺悔ゆくゆく

(僧は)「(仏道の)役に立たない子供たちは、捨てなさいよ。

懺悔は道すがら

聞かむ」とて、先に立ちたり。

聞こう」

と言って、

先に立ち去った。